

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：13401  
 研究種目：若手研究  
 研究期間：2019～2021  
 課題番号：19K14233  
 研究課題名（和文）ことばの教育として母語と連携する日本型小学校外国語カリキュラムの開発と実践研究  
  
 研究課題名（英文）Incorporating L1 into Foreign Language Curriculum Development and Teaching Practice  
  
 研究代表者  
 王 林鋒（Wang, Linfeng）  
  
 福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・特命助教  
  
 研究者番号：70806322  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：小学校外国語活動・外国語科の全面実施が始まり、学級担任が英語を指導する中、学級担任の強みを活かした小学校ならではの外国語教育の在り方を具体化していく必要がある。本研究では「ことばの教育」という視点から、母語と外国語の連携により言語力向上を目指す複言語主義アプローチを用いた「日本型小学校外国語カリキュラム」を構築することを目的とした。まず、母語と連携する外国語教育の必要性を検討するため、理論的・実践的な根拠を整理した。そして、教科書の比較分析により、母語と外国語が関連する言語的項目を選出し、ことばへの気づきに焦点に当てた教材を提案し、授業実践および事例検討を行った。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の外国語としての英語教育研究では、四技能をバランスよく統合しながらコミュニケーション能力を育成する教授法を推進し、母語の使用を極力排除してきた。それに対し、本研究は、母語と外国語を有機的に関連づけ、両者共通の基盤である「言語力」の向上を目指す外国語カリキュラム及び指導法を開発することから、従来の研究とは異なる学術的新規性を持つ。また、このカリキュラム開発は、小学校の学級担任の強みやALTを活かした教科横断型の「日本型小学校外国語教育モデル」と言える。これは、複言語教育においても注目されており、日本独自のものとして世界中の外国語教育研究に大きなインパクトを与えるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：With the full implementation of elementary school foreign language activities and subject, it is necessary to concretize a unique approach to foreign language education in elementary schools that takes advantage of the strengths of homeroom teachers. From the perspective of "language education as whole," the purpose of this study was to construct a "Japanese-style elementary school foreign language curriculum" using a plurilingual approach that aims to cultivate language proficiency through collaboration between the native language and foreign languages. First, in order to examine the significance of foreign language education linked to the mother tongue, the theoretical and practical grounds were organized. Then, through comparative analysis of textbooks, we selected linguistic items related to the mother tongue and foreign language, proposed teaching materials focusing on language awareness, and conducted classroom practice and case studies.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語教育 メタ言語能力 ことばへの気づき 母語と連携する外国語教育 複言語アプローチ

1. 研究開始当初の背景

学習指導要領において、小学校外国語には「日本語との違いを知り、言語の面白さや豊かさに気づく」、「日本語と英語の語順の違いなどに気づかせる」という文言があり、小学校国語には「言語能力の向上を図る観点から、外国語活動及び外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにする」との提起がある。これらに共通するのは、母語と外国語を有機的に関連づけた「ことば」という視点の存在である。柁木(2016)は、国語教育と外国語教育の連携に向けた動きを明治期に岡倉(1894)が提唱した国語・漢文・外国語の「連絡」までに辿り、歴史的観点から整理している。大津(1989、2008)は、学校教育における外国語学習の第一義的意義は母語を相対化するための手段であると位置づけた上で、「ことばへの気づき」を育てることと英語の熟達度の間には有意な関係があり、母語と外国語の効果的な運用を主張している。また、欧州で蓄積されてきた複言語複文化主義教育、具体的には母語と複数の言語を観察・分析・推論する「言語への目覚め活動」が日本の小学校外国語活動に応用可能であるという提起もある(Candelier, 2007)。しかし、日本では学級担任が英語を指導しており、学級担任の強みを活かした小学校ならではの外国語教育の在り方を具体化していく必要がある。その一つのアプローチとして母語と連携する外国語教育の提案が考えられる。

これまで中等教育において、言語横断的に働くメタ文法能力の育成に焦点を当て、国語と外国語が連携するデザイン授業を開発し実践を行った。その結果、生徒たちのことばの仕組みや働きへの意識が高まったことが実証された。さらには、小学校において、複言語主義の視野を取り入れたことばへの気づきを意識した国語・英語・中国語が連携する

授業の可能性を検討した。具体的には、日本の小学校国語教科書

表1 小学校国語教科書から外国語と関連づけられる活動(一例)

巻	頁	タイトル	内容	分類
3年下	26	修飾語	何をだれにどこでどんな	文法への気づき
	44	短歌を楽しもう	31音	音韻への気づき
	46	漢字の意味	同じ発音で違う漢字	単語への気づき
	96	ことわざについて	もの、表現、意味	運用への気づき

を分析し、外国語学習と結びつけられる題材を提案した(表1)。

しかし、これまでの研究では、なぜ母語と連携する外国語教育が必要なのかについて、理論的・実践的な根拠が十分ではなく、また小学校ならではの連携の在り方が検討されていない。2018年度から段階的に小学校英語の早期化・教科化の先行実施が始まったにも関わらず、教育現場では母語と英語が連携する具体的な授業内容や指導方法に関してまだ不明な点が多い。そのため、2020年度の全面実施に向けて、「ことばの教育」として母語と連携する小学校外国語カリキュラム及び指導法の開発は急務と言えよう。

2. 研究の目的

本研究では、日本の小学校の学級担任の強みを活かした、「ことばの教育」としての母語と連携する「日本型小学校外国語カリキュラム」を構築し、その重要性と可能性を明らかにすることを目的とする。従来の外国語としての英語教育研究では、四技能をバランスよく統合しながらコミュニケーション能力を育成する教授法を推進し、母語の使用を極力排除してきた。それに対し、本研究は、母語と外国語を有機的に関連づけ、両者共通の基盤である「言語力」の向上を目指す外国語カリキュラム及び指導法を開発することから、従来の研究とは異なる学術的新規性を持つ。また、このカリキュラム開発はすなわち、全教科を担当する日本の小学校の学級担任の強みを活かした教科横断型の「日本型小学校外国語教育モデル」と言えるものである。教員が持つ強みを活かすという視点は、これまで複言語教育においても注目されておらず、日本独自のものとして世界中の外国語教育研究に大きなインパクトを与えるものとする。その点において、本研究は極めて高い創造性と独自性を有する。

### 3. 研究の方法

文献研究法で、母語と連携する外国語教育の基盤を探り、その必要性を裏付ける。理論的視点として、ことばの普遍性 (Chomsky, 1965; Samuels, 1979)、二言語相互依存説 (Cummins, 1984)、ことばの気づき (大津, 1989; Schmidt, 1990)、言語と文化の多元的アプローチ (Candelier, 2007) を想定している。先行研究を整理・検討し、母語と連携する外国語教育の有効性を理論的に導き出す。

母語と連携する外国語の授業を実施している海外への現地調査を行う共に、研究協力者である国内の2名の小学校教員と継続的に授業実践を行う。現地調査は、フランス発の多様な言語を用いた「言語への目覚め活動」と、スイス発の「言語への開き活動」を実践する海外の学校を視察し、授業の参観および資料を収集する。また、国内の関連する実践例を調査しつつ、去年から申請者と継続的に協働研究を行っている協力者のクラスで、母語と連携する外国語の授業実践を行う。2名の研究協力者は、それぞれ福岡県内の公立小学校、神奈川県内の公立小学校で学級担任をしている。彼らとの協働研究により、母語と連携する小学校外国語教育の授業実践例を蓄積する。

日本の教科書の教科横断的比較分析から、国語と外国語が関連する言語項目及び内容を抽出し、言語活動を開発する。教科書の比較分析の対象は、小学校検定国語教科書の採択率が50%以上を有する光村図書(3年生~6年生)と文部科学省が作成する小学校英語教科書『Let's try 1~2』『We can 1~2』の合計10冊である。教科書を分析する枠組みは、言語を客体として意識・観察・運用する力と定義するメタ言語意識(生越, 2007)の四領域、つまり、「音韻への気づき」、「単語への気づき」、「言語形式・文法への気づき」、「運用上の気づき」とする。教科書の教科横断的比較分析の結果に基づきながら、国語と外国語が関連する言語項目及び内容を抽出する。そこから、複数の言語の「観察・分析・推論」を必要とする言語活動をデザインし、カリキュラムとして提案する。それを踏まえて、授業実践を行う。

### 4. 研究成果

#### 日本語・英語・中国語を取り入れた外国語科授業実践

##### 1) 自分の名前を中国語で言ってみよう

生徒に、「自分の名前を中国語で発音してみよう」と誘って、何人かの生徒が前に出て日本語の名前を書いてもらった。彼らは、私と1対1で発音練習してから、全員に向けて、中国語で自分の名前を言った。聞きなれていない中国語を発音することでみんなの集中力が高まり、教室の雰囲気明るく変わった。

##### 2) 中国の地図から都市を探してみよう

活動の狙いとしては、私の実体験から中国の都市に触れること。4人グループになって、A3一枚の地図をペアごとに配った。この活動は、私が、英語で「生まれた都市」、「育った都市」、「大学/大学院を過ごした都市」、「日本語を学んだ都市」を一文ずつ言い、スライドの提示とともに、生徒たちに場所を見つけてもらうことをした。

##### 3) 『春暁』を中国語で音読して気づいた

テキストは小学校5年生の教科書からとった。復習の意味で音読した後、中国語版の『春暁』を示し、音読した。同時に両者を比較するワークシートを配布して、「何が違う?何が同じ?」と問いかけた。

##### 4) カルタゲームで聞き取れた中国語カードを選ぶ

生徒が中国語に興味を持ってきたところで、実は分かる中国語があるんだという外国語に対する親近感を持たせるため、中国語を聞き取るカルタゲームを導入した。生徒4人のグループに、中国語を書いたカード10枚を一セットずつ配った。表は漢字、裏面はピンインを書いた。選んだ単語は音読みで中国語の発音と似ている、更に日本語との意味も同じである。

##### 5) 中国語の意味を当ててみよう漢字クイズタイム

中国語も発音はほぼ同じだという親近感が漂う雰囲気になってきたところで、中国語では違う意味を持つ漢字があるという漢字クイズを出した。よい揺さぶりになると

思い、同じ意味を持つ漢字を混ぜた。

6) 日本語・中国語・英語を比較して、気づいたことや感じたことを書こう

文型 SVO について、「中国語や英語は述語が先」という語順の違いに気づいた記述が多かった。日本語の規則性、独特性に注目していた意見が見られた。例えば、「日本語は『は』や『が』などのことば(単語をつなげる言葉)があるけど、中国語や英語にはそういう言葉がない」;「日本語のように『を』『の』『く』などを使わずに中国語は漢字だけで英語も単語だけを使ってしゃべっていること」などである。

また、日本語の成り立ちに気づいた生徒がいた。例えば、「日本語の中にも中国語や英語が混じっていたりする」;「漢字の起源、中国人などを含む渡来人によって文字を教わり、その字が漢字だったからにているのでは」;「日本語は漢字とひらがなとカタカナを使っている」などである。

発音への気づきは、中国語だけではなく、英語に言及した記述があった。「日本語と中国語は漢字でまだ分かるけど、英語は、アルファベットで発音と意味が違う」;「英語の発音は中国語とはアルファベットでもちがう発音をしていて意外だった」などである。特に発音が独特に興味を持ちました。そして、自分の名前を中国語で言ってみて二人から、次のような感想があった。それは発音の仕組みを自分なりに考えたり予想したりすることの楽しさを味わうことのものであり、そのことは、言語を分析する力に繋がり、言語力の基礎を築く基盤となるものである。

三つの言語に触れることから、言語観や言語そのものの豊かさに気づいた記述が見られた。個別の言語からすべての言語の面白さや奥深さに感心し、言語を通して文化、歴史、民族への理解が深まる機会となった。「日本語と中国語の発音は少し違っても意味が同じものが多くて驚いた。英語は英語なりの発音などがあって、世界にはたくさんさんの言語があって面白いと思った」;「日本語と中国語は違うところも同じところもあって、兄弟みたいだと感じた。どの国の言語も大切に、言葉を楽しみたいと思う」;「中国語と日本語の意味はほとんど似ているが、似ていないものは大きく違うのでそこに気をつけなければいけないところが中国語の面白さだと感じた」;「ことばの世界はおくぶかい」;「言語はすごい。民族によって言語が違うのに通じ合えた」;「中国と日本の古くからの関係が見えた」時間になった。

複数の言語を比較することが、次の言語学習の動機づけになるきっかけになったことが分かった。外国語への興味がわいたことや特定の項目に注目したい、何かについてもっと知りたいという意欲の向上にいい影響を与えた。「中国語への興味がわいた」;「普段はあまり関わりのない中国語なので、もっと知りたいと思った。もっと違いを見つけていきたい」;「中国に行ってみたい。母・子音の異なりにも注目したい」;「中国語をゆっくり読むと日本語に聞こえたことをかるたでしたり、中国の文字の意味をクイズでやるととてもおもしろかったです」;「英語は共通だが、中国での英語のしんとう率が気になった」;「日本語と中国語はいままでまったく違うものとしてうけとっていたけど、今回の授業を通して似ていると感じました。かるたが楽しかったです。ちなみに一番の答えはなんだったんですか」。

#### 複言語アプローチを用いた「ことばへの気づきから世界の言語を学ぼう」授業実践

2020年度では、中国語以外の外国語にも触れる機会を作ろうと今回のオンライン複言語主義アプローチの授業実践を提案した。それは、中国語を含め外国語を話せるゲスト講師を数名募集し、グループごとに児童生徒が英語以外の外国語を一つ選んで触れることによってことばへの気づきを育む授業である。この授業実践は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため Zoom で行われた。

各外国語グループのゲスト講師は、こちらからの呼びかけで八つの言語グループ合計9人のメンバーたちが集まった。大学関係のゲスト講師が多い。日本の児童生徒が英語以外の外国語に触れる機会を作るため一つの言語グループを担当してもらうように依頼した。当日の流れは、はじめに8人のゲスト講師の自己紹介(10分)の後、言語ごとのグループ活動(35分)とワークシートに振り返りを書く(5分)と合計50分授業だと事前に案内した。ゲスト講師が各自に作られた言語グループ用の資料スラ

イド及びワークシートを授業前に生徒に配布した。グループでの使用言語を日本語に基本としたが、英語で活動を行ったグループ(マーレ語)もあった。授業実施後の2021年3月にゲスト講師たちの参加理由及び感想のインタビューを行った。日本の中学生がそれぞれの言語に触れることでその国や文化にも興味を持たせる期待、外国人として日本人の中学生に言語を教える経験の面白さ、言語に拘らず関連する歴史や文化を伝える思い、グローバル市民の素質を養う一環の大切さ、そして日本の学校を対象にする複言語活動の必要性といった異なる理由が明らかになった。

#### 小学校学級担任、ALT、英語科教員と一緒に学びあうコミュニティの構築と発展

日本型外国語教育のあり方を実現するには、小学校学級担任、ALTと中高英語科教員をつないだ持続可能な専門職コミュニティの構築と発展が重要である。その必要性を見据え、2020年1月に、学校種を横断して自由に参加できる「ALTと学校教員による外国語教育実践を語り合う会」(Monthly Edu-Cafe)を立ち上げた。現在、20回の開催を経て、全国の小・中・高校の現職教員、ALT、指導主事、大学生、大学教員といった異なる背景を持つメンバーが参加している(王、2020a)。ALTの専門性向上とチーム・ティーチングの協働体制を具体化するため、日々の授業実践に関わるアイデア、思いや悩みを語り合い、授業事例を共有し話し合う場として、月1回オンラインで開催している。そこでは、会の進行、話題提供、グループでの語り合いに加えて、ニュースレターの発行が日英両語を用いて続けている。こうした実践を通して本研究の着想を得るとともに、本研究の着手に向けた理論的・実践的な準備を蓄積してきた。

教師教育の分野においては、専門職の学び合うコミュニティ(Professional Learning Community:以下PLCと表記)に関わる国際的動向を国内の授業研究のモード・シフトと連動して見ることができる。Hord(1997)がPLCの概念を初めて提唱し、児童生徒の学びが向上するには教師の協働による専門性開発が重要であると主張した。それから、DuFour(2004)が教師の教えから児童生徒の学びへ重点を置くように専門性を高め続ける教師協働文化の醸成を強調した。さらには、Hargreaves & O'Connor(2018)がすべての児童生徒の成長を促進するため、「教師間がどのように協働する」から「協働をどのように深める」への転換を提示しPLC理論を発展させた。この流れから、単なる協働から協働の深まりへ転換する共通ポイントの一つとして、日常の実践を協働的に省察することが提案されている。

海外の動向に対して、日本の学校において伝統的に行われてきた授業研究は、教師の専門性を高め合うPLCの機能を果たしてきた。授業研究の質的な転換は、木村・岸野(2019)が質的データから析出した授業研究のモード・シフトに表れている。モード1が教師の教え方の評価を重視、モード2が指導案の検証を重視、モード3がこどもの学ぶ姿の根拠を重視、モード4がこどもの学びのプロセスを教師が継続的に協働探究することを重視、のようなモデル類型が紹介された。彼らは、モード4協働探究型の授業研究へのシフトを実現するには、教員たちが実践を協働で省察し、それにより実践を再構成していくことが必須であると示した。

このような動向から、令和の日本型学校教育を実現できる専門職集団の資質向上に向けて、教員だけではなく、学校教育に緊密に関わっているALTの実践的力量的向上についても検討することが極めて重要である。それにより、日本独自の外国語教育の質向上につながるALT制度の充実及び専門性開発が期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 7件 / うちオープンアクセス 15件）

1. 著者名 Linfeng Wang, Michael Kuziw	4. 巻 14
2. 論文標題 Developing Community of Practice of ALTs and School Teachers: Design and Management of Monthly Online Edu Cafe 2020.1~2021.12	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 141-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 王 林鋒, 血原 正純, 松田 通彦	4. 巻 14
2. 論文標題 学校常勤教員を目指す現職ALTの専門性向上を支える実践事例 連合教職大学院ミドルリーダーコースのALT院生の学びに寄り添って	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 81-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Linfeng Wang, Santiya Parthippen, Ryan Thornton, Chhoem Sosakkona, Kiyonori Okubo, Hirohito Takata	4. 巻 14
2. 論文標題 A Reflective Lesson Study on Peace Education Through a Collaboration between Japanese School Teachers, an ALT and MEXT Teacher Training Students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 243-265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 王 林鋒	4. 巻 19
2. 論文標題 Co-inquiring Professional Learning of a High School ALT through a School-based Teacher Education Program	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JACET Chubu Journal 大学英語教育学会中部支部紀要	6. 最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 王林鋒	4. 巻 19
2. 論文標題 Co-inquiring Professional Learning of a High School ALT through a School-based Teacher Education Program	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JACET Chubu Journal 大学英語教育学会中部支部紀要	6. 最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Linfeng Wang, Santiya Parthippen, Ryan Thornton, Choem Sosakkona, Kiyonori Okubo, Hirohito Takata	4. 巻 14
2. 論文標題 A Reflective Lesson Study on Peace Education Through a Collaboration between Japanese School Teachers, an ALT and MEXT Teacher Training Students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 243-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Linfeng Wang, Michael Kuziw	4. 巻 14
2. 論文標題 Developing Community of Practice of ALTs and School Teachers: Design and Management of Monthly Online Edu Cafe 2020.1~2021.12	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 141-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 王 林鋒, 血原 正純, 松田 通彦	4. 巻 14
2. 論文標題 学校常勤教員を目指す現職ALTの専門性向上を支える実践事例 連合教職大学院ミドルリーダーコースのALT院生の学びに寄り添って	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 81-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Linfeng Wang, David Sekao	4. 巻 14
2. 論文標題 School-based Reflective Lesson Study in Japan and South Africa: Towards A Bilateral Joint Research Project	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 267-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 王 林鋒 Linfeng Wang	4. 巻 10
2. 論文標題 Action Research on Collaborating Mother Tongue and Foreign Languages in EFL Materials Development	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Journal of East Asian Educational Research	6. 最初と最後の頁 82-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 王 林鋒	4. 巻 13
2. 論文標題 ALT の学び合うコミュニティを創造する試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 139-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 王林鋒	4. 巻 13
2. 論文標題 ALT と日本人教員による実践し省察するコミュニティの構築と実践: “ALT と日本人教員による外国語教育実践を語り合う会” の運営に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 153-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 王林鋒 Linfeng Wang	4. 巻 18
2. 論文標題 Analysis of Practice Activities in Japanese and Chinese EFL Textbooks	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JACET Chubu Journal 大学英語教育学会中部支部紀要	6. 最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 王 林鋒	4. 巻 20
2. 論文標題 ことばの教育として国語と連携する小学校外国語教育の実践研究：教科書開発を見据えて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JES Journal	6. 最初と最後の頁 100-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 王 林鋒	4. 巻 12
2. 論文標題 母語と連携する外国語教育の教材開発に関わる協働的实践研究：教科書を生かした授業実践事例を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教師教育研究	6. 最初と最後の頁 181-193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 Linfeng Wang, Yuu Kimura, Makito Yurita
2. 発表標題 Reflective and Sustainable Lesson Study Practice through University-School Partnership
3. 学会等名 The World Association of Lesson Studies (WALS) International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 An ALT ' s Narrative Inquiry as a Reflective Practitioner
3. 学会等名 第21回小学校英語教育学会(JES)関東・埼玉大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 教職大学院におけるALTの専門職学習コミュニティに関する事例研究
3. 学会等名 日本教師教育学会第31回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 How Materials are Designed in Elementary English textbooks in East Asian Countries
3. 学会等名 The 12th Biennial Conference Comparative Education Society of Asia (CESA) ( 国際学会 )
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 How ALTs' Teacher Agency Are Achieved in A Professional Development Program
3. 学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 Co-inquiring Professional Development of ALTs through a School-based Teacher Education Program
3. 学会等名 Japan-U.S. Teacher Education Consortium 31st JUSTEC Virtual Conference ( 国際学会 )
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 Unfolding Reflective Lesson Study Practices of In-service Teachers in Japanese Schools
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies (WALS) ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 How ALTs' Teacher Agency Are Achieved in A Professional Development Program
3. 学会等名 全国英語教育学会第46回長野研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 How Materials are Designed in Elementary English textbooks in East Asian Countries
3. 学会等名 The 12th Biennial Conference Comparative Education Society of Asia (CESA) ( 国際学会 )
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 Co-inquiring Professional Development of ALTs through a School-based Teacher Education Program
3. 学会等名 Japan-U.S. Teacher Education Consortium 31st JUSTEC Virtual Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 教職大学院におけるALTの専門職学習コミュニティに関する事例研究
3. 学会等名 日本教師教育学会第31回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王林鋒
2. 発表標題 An ALT 's Narrative Inquiry as a Reflective Practitioner
3. 学会等名 第21回小学校英語教育学会(JES)関東・埼玉大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Linfeng Wang, Yuu Kimura, Makito Yurita
2. 発表標題 Reflective and Sustainable Lesson Study Practice through University-School Partnership
3. 学会等名 The World Association of Lesson Studies (WALS) International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王 林鋒
2. 発表標題 ことばの教育として国語と連携する小学校外国語の教材開発
3. 学会等名 第20回小学校英語教育学会(JES)大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 王 林鋒
2. 発表標題 Action Research towards Partnering L1 with EFL & CFL in Japanese Schools
3. 学会等名 The 17th Asia TEFL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 王 林鋒
2. 発表標題 ことばの教育として母語と連携する小学校外国語教育の実践研究：教科書を活用した授業実践事例を通して
3. 学会等名 第19回小学校英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 王 林鋒
2. 発表標題 Incorporating L1 and Multiple Languages in EFL Classes in East Asian Countries
3. 学会等名 World Education Research Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 王 林鋒
2. 発表標題 Action Researches on Incorporating Japanese and Chinese in EFL Classes
3. 学会等名 大学英語教育学会JACET2019国際大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 王 林鋒（分担執筆：第2章 2. 中国の英語教育における文法指導の展開と現在）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 メタ言語能力を育てる文法授業：英語科と国語科の連携	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------